

令和元年度 自己評価書

秋田公立美術大学附属高等学院

1 本年度の学校評価をふりかえって

今年度は本学院で培った基礎学力や美術の専門性を活用し、地域社会に貢献する体験を積み重ねて生徒の成長を図ることを重点として教育活動を推進した。本学院の創作活動の集大成である「明日のクリエイターたち」展示会では、生徒が準備段階から参画し、ギャラリートークや中学生対象の作品ツアーガイド、特別講師を招いての作品講評会等を実施し、1,000人を越える集客を実現できた。また「美大附デザインラボ」の名称で専門性を生かした社会貢献活動の窓口を一つとし、学校運営協議会を設立して、委員の方々の支援を得ながら生徒の活動の幅を広げた。多様な年代の方々と関わりながら活動することで、生徒に「他人を思いやる心、感動する心などの豊かな人間性」「物事に進んで取り組む主体性」「様々な問題に積極的に対応し解決しようとする力」などの向上が見られた。

2 評価結果の概要

分野	評価項目	取組状況と成果・課題	評価	改善策
教育課程・学習指導	社会に開かれた教育課程の実現	栗田支援学校や日新小学校の授業サポート、新屋地区の方々と関わりながらポスター作成やボランティア活動を実施する等地域社会の「もの・ひと・こと」の教育素材を積極的に取り入れた。生徒は自分と社会の関わりの中で表現力や想像力を磨き、活動意欲の向上が見られた。	A	今年度より設立した学校運営協議会との協働を基盤として、生徒が地域の方々と直接関わって活動する教育活動を定着させ、目指す生徒像の実現を図る。また、3年間の成長を見据え、系統的な教育活動を推進する。
	自己有用感を醸成する教育活動の工夫	授業改善課題に自己有用感を高める工夫を掲げ、存在感・貢献感・承認感の向上のための工夫を行った。授業ではペアやグループの対話を通して課題解決を行ったり、生徒が自分の考えを表現する場を工夫したりした。成果として普通教科、専門教科ともに生徒が生き生きと表現活動に取り組む姿が見られた。	B	自己有用感の醸成は、次年度も継続課題として取り組み、授業の振り返りや活動後のフードバックで、承認や貢献を実感させる工夫を加えたい。また、活動を支える基盤となる基礎学力の更なる向上が課題である。
	実践的な進路指導の工夫	生徒の多様な進路希望に応え、上級学校の講師を招いた特別授業やオープンキャンパスへの参加支援を行ったり、ハローワークと連携してインターンシップやマナー講習会等を実施したりした。成果として、生徒の進路意識が高まり、卒業後の進路希望をもち、努力を重ねる生徒が増えた。	A	将来の進路や職業と結びつく実践的な体験活動を充実させ、自己の適性を把握した上で、進路の目標を明確にもたせる指導を継続する。自主的に進路情報を集めたり、進路実現のために家庭学習を積み重ねたりするなどの積極的な姿勢を育てたい。
生徒指導	いじめ防止の取組の充実	年5回のアンケート調査と生活満足度調査を実施して生徒の内面をきめ細かく把握し、いじめの早期発見・早期対応とともに自律の力を養う積極的な生徒指導に取り組んだ。さらに、生徒が策定したSNSガイドラインについて定期的に調査を行って、ルール遵守を徹底した結果、使用態度の向上が見られた。	A	生徒会執行部をリーダーとして委員会活動を活性化し、生徒の自治意識を高めて、いじめ防止、SNS使用ルールの徹底等生活の向上を目指す校風を醸成したい。疎外感やからかい等も含めて小さな芽を見逃さずに早期対応を継続する。
	心身の健康増進の取組の充実	学校生活への適応や基本的な生活習慣の確立、ストレス耐性に課題を抱える生徒が増加傾向にあり、スクールカウンセラー、養護職員、専門機関と連携して生徒の実態に応じたきめ細かい支援を行った。また、特別な支援が必要な生徒に対して、個別の指導計画の下で共通理解しながら支援を進めた。	B	スクールカウンセラーや専門機関の指導を得て、心身の健康増進を図るための教育活動を計画的に授業やホームルーム等特別活動で実施する。例えば、体育の授業のウォームアップで心身を整える基礎運動を取り入れる等を試みる。
家庭・地域との連携	地域協働プロジェクトの推進	社会人基礎力の育成を目指して、地域・社会のニーズを捉え、美術の力で応える活動の充実を図った。大人と関わり、意見交換をしながら協働でものやことを作り出す活動を積み重ね、アンケートの結果、特に3年生で生徒の状況把握力や課題発見力、実行力、想像力に向上が見られた。	A	「美大附デザインラボ」の活動充実のための校内体制と校外各機関との連携体制を整備し、生徒が専門性を生かして地域に貢献する場の拡大を図る。また、生徒の活動の様子を多方面に発信し、本学院の特色ある活動の一つとして定着させたい。
	秋田公立美術大学との連携	連携授業では、ワークショップへの参加や教授の作品を鑑賞する機会を得て専門性を高めることができた。また、秋美大生を招いてシンポジウムを行ったり、共に地域で多様な活動を行ったりする等の交流ができた。成果として、秋美大で学びたいと考える生徒が増え、過去最高となる11名の進学を果たした。	A	公立美大との連携体制を整備し、学院のコンセプトを大学と共有しながら、美術工芸やデザインの力で秋田の発展に寄与する人材育成を目指したい。さらに、秋美大生と本学院生徒との交流を深め、憧れを醸成して秋美大進学への意欲を高めたい。